中学校教職員における同僚間の学び
−教科指導・学年経営・校務分掌等における「協働」場面に着目して−

学籍番号　209302
氏　　名　池中　貴史
主指導教員　田中　真秀

１．はじめに

1.1. 問題意識と課題設定

教員に求められる資質能力の１つとして「自主的に学び続ける力」がある。しかし，日本では教員の長時間労働が問題となり，校内外の研修への参加を含めた能力開発の機会損失となっていることが懸念されている。そこで多忙である教員が大きな負担なく学び続けるためには，日常の業務の中から教職員同士で学び合っていく必要がある。そこで教職員が同僚性を構築することができれば，互いに学び合うことが可能になる。しかし，先行研究ではどのような取り組みが同僚性の構築に効果的であるかは述べられているものの，高い同僚性がどのような場面・集団で学び合いを生んでいるのかについては明らかにされていない。

そこで本論では「協働」場面として実習校での教科指導・学年経営・校務分掌等の実践とそれにおける教員の関わりに着目する。本論での「協働」とは「目標達成や課題解決に向けた集団での取り組み」とし，「協働」場面で生まれる人間関係に「同僚性」があると捉えている。そこで，「学び合う同僚性」という言葉を基に，「共に業務に当たる中で，相互に支え合い学び合う関係性」を「同僚性」と定義する。

1.2. 研究の目的と方法

研究の目的は，若手教員が同僚性を構築する過程の中で困難と感じること，その解消方策は何かを検討することである。さらに，実習校の「協働」場面からどのように同僚性が生まれ，どのような学び合いがあるのか等の情報を収集し，その場面・集団を分析する。

研究方法としては①先行研究の分析，②実習校での参与観察と筆者の教育実践，③管理職・担当学年団・担当教科団の教員へのインタビュー調査の3点である。②実習校での参与観察と実践は①先行研究の分析と対比的にとらえて考察を行った。教科指導として数学と道徳の授業やそれに伴う会議や打ち合わせ，研究授業等への参与観察とともに，授業実践を行った。学年経営に着目する際には対象学年の生徒理解をはじめとした日々の活動だけでなく，実習期間に実施された学校行事や学年会議への参与観察を行った。他にも，職員会議や様々な校内研修への参与観察，部活動指導等を行った。ただし，本論で取り扱う「協働」場面は，実習中における場面のみであるという点と，筆者の実習における参与観察や実践を中心とした「協働」場面であることについては限定的であるという課題が残る。

２．教科指導における「協働」

実習における様々な「協働」場面で見られた「同僚性」に着目する。「協働」場面における

集団での取り組みの中で，目標達成や課題解決のために教職員同士が話し合う過程で学び合いや，他者の実践から自身の実践に生かせるような学びがある。また，ある「協働」場面で構築された「同僚性」が他の場面での学び合いに作用することもある。本論では「協働」場面で生まれる学び合いと，「同僚性」が作用して他の場面で生まれる学び合いの両方に着目していく。

2.1. 数学の教科指導における「協働」
2.2. 道徳の教科指導における「協働」

実習校の教科指導や生徒に関する情報等が含まれているため要旨への記載は省略する。

３．学年経営や部活動指導，校内研修における「協働」

3.1. 学年経営における学年団での「協働」
3.2. 部活動指導や校内研修等での「協働」

実習校の生徒指導の情報や研修の実態等が含まれているため要旨への記載は省略する。

４．まとめ

4.1. 若手教員が「同僚性」を構築する過程で感じる困難さとその解消方策の検討

実習校での様々な「協働」場面を通した「同僚性」構築の過程から，１.対等な立場での意見交換のしづらさ，２.知識・情報不足からくる学校文化への共通認識を持つことへの困難さの２点が若手教員にとって「同僚性」構築への困難さとなっていることを示した。

それらの困難さを解消するための方策として①専門性の発揮，②協働場面への積極的な参加の２点が有効であることを提案した。①「協働」場面での専門性の発揮が，信頼の獲得につながり「対等な立場での意見交換」をすることのできる「同僚性」の構築に効果的である。②「協働」場面への積極的な参加が，組織の一員として認められることにつながる。また，「協働」場面への参加そのものが，知識・情報不足の解消や，共通認識を持つことにつながり，「同僚性」の構築につながると分かった。

4.2. 実習校での「協働」から見えた同僚間の学び

数学の教科指導においては，教科会等の場面では情報が共有されているが，普段の活動場面で時間的な余裕もなく情報共有がされにくい。一方で，学校全体で道徳を考えるといった指導体制（組織）が構築されている場合は，その学びが学校全体へ波及している場面もあった。学年団においては，各教員の目標や課題を共有することが同僚性の構築に効果的であった。

4.3. 今後の課題

本論で述べてきたことを踏まえて，今後の課題として，①若手教員を含めた教員が専門性を発揮しやすい場面とはどのような場面か，またその場面の構築に必要なことは何かを明らかにすること，②同僚性を構築するために有効なベテラン教員からの働きかけは何かを検討すること，③同僚性が構築されている集団での学びを学校全体に広げる方策を検討することの３点が挙げられる。